

# 学校と地域をつなぐ、 スクールソーシャルワーカーの役割

いじめや不登校、あるいは暴力行為や児童虐待など、児童・生徒たちを取り巻く環境は、日々、深刻さを増しています。これまで大阪市では市内の公立の全中学130校にスクールカウンセラー1名をそれぞれ配置してきましたが、平成19(2007)年12月、国は新たに「スクールソーシャルワーカー(SSW)活用事業」の実施を打ち出し、平成20(2008)年4月から2年間の調査研究を行っています。

現在、大阪市では5名のスクールソーシャルワーカーが中学校に配置されています。今回は、スクールソーシャルワーカーの役割等についてご紹介します。

## スクール ソーシャルワーカー (SSW)とは？

[特定の資格制度はないが、社会福祉士や精神保健福祉士等の資格を有し、教育現場等での経験を併せ持つ専門家]

学校内あるいは学校の枠を越えて関係機関等と連携し、問題を抱える子どもの課題解決を図るためのコーディネーター的な役割を果たします。



## スクール ソーシャルワーカーの 職務内容は？

- ①問題を抱える児童・生徒が置かれた環境への働きかけ
- ②関係機関等とのネットワークの構築・連携・調整
- ③学校内におけるチーム体制の構築・支援
- ④保護者、教職員等に対する支援・相談・情報提供
- ⑤教職員等への研修活動等

学校、家庭、地域等、子どもに関わるすべての背景や状況を視野に入れながらケース会議等を実施します。そこで「見立て」「手立て」を教職員等と共有し、それぞれの役割分担を明確にしながら、チームとしての支援体制で子どもを取り巻く環境の改善を図っていきます。

## スクールカウンセラー との違いは？

明確に区別するのは難しいですが、大まかには、スクールカウンセラーの活動領域が主に学校内であるのに対して、SSWの活動は学校内に留まらず、学校に通えない子どもへの家庭訪問など地域全般に及びます。また、スクールカウンセラーが主にカウンセリングの手法で、児童・生徒の内面に焦点を当てるのに対して、SSWは主にソーシャルワークの手法で、関係機関等のネットワークを活用したりすることにより、問題の解決に当たります。

## 大阪市教育委員会事務局に聞きました

### 学校と地域をつなぐパイプ役に！

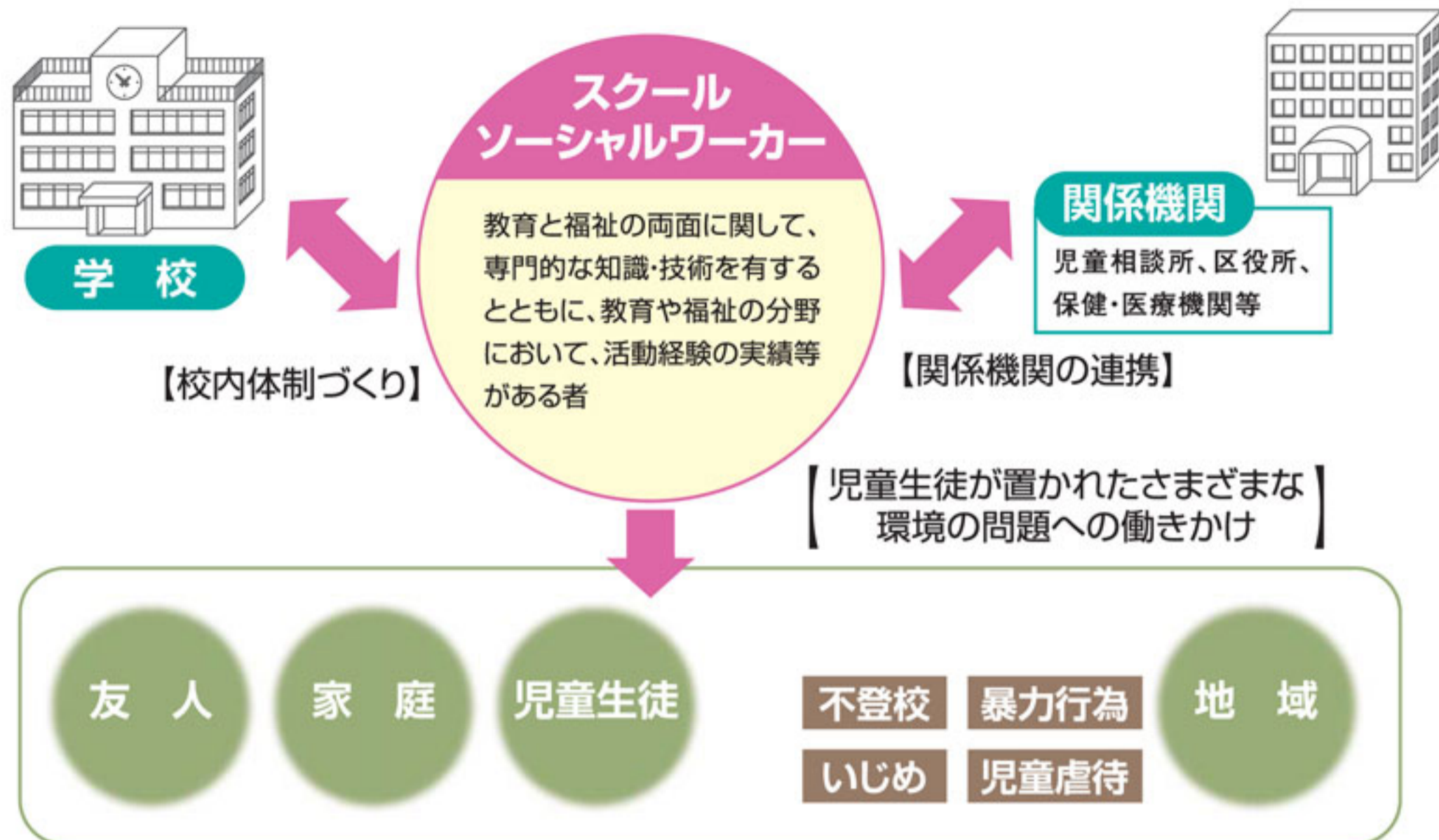
現在、中学校での不登校率は4%程度とされています。この数字だけだと少なく見えるかもしれませんが、100人で4人、それをクラス25人で換算すると実に1クラスに1人は不登校の生徒がいるという計算になってきます。つまり学校には問題を抱えている児童・生徒が想像以上に多いのです。

これまで学校には、福祉からの観点というのがあまりなかったように思います。でもこれからは地域とつながっていくためのコミュニケーションづくりが、より必要になってきます。スクールソーシャルワーカーには、その連携をより意味のあるものにする、パイプ役のような活躍を期待しています。





## 《スクールソーシャルワーカーの活用事業》



## 現役スクールソーシャルワーカーが語る、SSWの仕事

スクールソーシャルワーカー ● 磯田智子さん

### 子どもにとっての最善の利益を最優先に考えています

私が配属されている中学校では職員室に机を置かせてもらっています。スクールソーシャルワーカーという名の通り、教育機関で活動する福祉人材ということで、最初の頃はどうしても「この人は一体何をやる人なんだろう?」という好奇心で見られます。それは中学校の先生にも同様で、先生が預かる大切な生徒や保護者に私に関わっていくわけですから、「私はスクールソーシャルワーカーですから」当然といった態度では到底うまくいくわけがありません。まずは先生に何者かを理解してもらうことを第一に心掛けました。

中学校には様々な問題を呈する生徒がいますが、まずなぜそのような状態に陥っているのか、学校を含め生徒を取り巻く環境全体を視野に入れてその原因や背景を見ていきます。例えば不登校の生徒の場合、家庭訪問をして話を聴くことがありますが、すんなり話ができて進展していくケースもあれば、話を聴くこと自体難しいこともあります。その時は生徒あてに手紙を書くなど次の手段を模索していきます。家庭訪問といっても、単に状況を聞き取りにいくだけではなく、それは人と人との出会いの場なわけですから、じっくり時間をかけ、その中で相手がどんな問題を抱えているのかと想像を巡らせることも不登校を

理解する上での重要なファクターとなるんです。

基本的には私たちの仕事というのは、様々な問題を抱える子どもがいる家庭を保健・医療・福祉機関などをつなげたり、そのための情報収集であったり、後方支援的なものも多いです。つまり学校の中で子どもを見ていくと同時に地域とも協力して見ていきましょう、という形づくりですね。そうした中から、子どもにとっての最善の利益を探っていきます。

義務教育が終わったら引き続き地域で子どもを見ていくこととなります。中学校を卒業したから終わりというのではなく、それまでの関わりを次のステージにスムーズに引き継げるようにします。また、保護者と学校の思いの行き違いが生じているような場合に、間に入って両者の関係を円滑にする役割もあります。

すべてが解決するケースばかりではなく、解決が容易でないケースもありますけど、いろいろな活動を通じて、ほんの少し子どもの心が動いたり状況が変化する、そんな瞬間があるんです。もちろん、だからといって問題が一件落着くわけではないんですが、そういう時はやっぱり、この仕事をしていて良かったと改めて感じますね。